

月報	日本キリスト改革派 横浜中央教会	2016年4月10日 4月号
----	---------------------	-------------------

創立宣言、「主張の第一点」を考える

M. M

毎年4月になると、私たちの教会では礼拝で〔日本キリスト改革派教会血豆宣言〕を朗読します。創立宣言は、今から70年前の1946年4月29日に創立された改革派教会の原点もしくは理念というべきものです。

創立宣言に込められた2つの主張の実現にこそ、改革派の理想とする教会倫があると常々教えられていたのはこの3月に召された矢内昭二先生でした。矢内先生は東京教会の初代牧師として長いこと奉仕なされた教師です。そして、横浜に理想とする改革派教会をと尽力され、横浜西口教会、横浜中央教会へと全面的に指導と支援を続けてくださった改革派教会のリーダー的教師でした。矢内教師は先に召された榊原康夫先生との共著「創立宣言の学び」（1985年）の中で、創立宣言の根本的主張を次のように教えています。

「主張の第一点は、キリスト教有神論的人生観・世界観こそ国家の基、文化の根底であるという確信」、「主張の第二点は、一つ信仰告白と、一つ教会政治と一つ善き生活において具現される改革派教会形成の論理」、「この二つの主張がそこから出てくる共通の源泉は、カルヴィン主義の神中心の思想」、「創立宣言は国家と文化、教会と人類の歴史を、神の前で、神中心に考えている。この神中心の思想こそ宣言を解く鍵である」と。

創立宣言の2つの主張は「主張の第二」に比べて「主張の第一」は量的に少なく、冒頭の数行に要約されます。すなわち、戦時下の宗教弾圧に屈した教会の大きな罪にもかかわらず「歴史を支配し給ふ神の摂理により、宗教の自由は遂に敗戦を通して祖国日本にもたらされた。」ことに感謝、その上で「今後より良き日本の建設の為に我等は誠心誠意歴史を支配し給ふ全能にして至善なる神の御心に適ふ者となる」こと、「食ふにも飲むにも、何事をなすにも凡て神の栄光をあらわすことを以て至高の自的とする」こと、「この有神的人生観、世界観こそ新日本建設の唯一の確なる基礎、日本基督改革派教会の主張の第一点にして、我等の熱心此処に在り」との宣言です。

この主張の第一点は、30周年宣言における「教会と国家の関係」について受け継がれ、今回の「70周年宣言」でも「世に仕える教会」として表現されているように思います。改革派教会と教会員は、異教とその文化が政治・社会・生活の中に桓を張りめぐらす国にあって、少数であっても主イエスキリストに属する者として「地の塩、世の光」の働きを進めようと志してきたと思います。しかし、創立宣言で神さまの前に願い出た「有神的人生観、世界観」に根差す宣教は十分ではありません。戦後70年を経た今日、改革派教会も日本も「世界史的転換」の大波に揺さぶられています。いま一度、創立宣言の主張に立ち還るべき時です。

感 謝

M. M

大好きな読書も年と共に遅々として進まず、積んで置く本が多くなって来ました。そんな折、曹関わった学生の J 子が遊びに来て、彼女の後輩が教科書の「七度読み」を実行して努力し、弁護士の資格を取った話を熱っぽく語ってくれました。私は J 子に

「聖書の二度読みをしない？」と誘ってみましたら彼女は目を輝かせましたので早速実行する事にしました。J 子の家は栃木県の外れにあるので、中々出て来れません。我が家はあまり家を空けれないので夜の八時からそれぞれの家で読む事にしました。教科書は立石章三著「旧約聖書の歴史」を「二度読み」して、三度目はこの箇所先生の説教テープを必ず聴くことに決めました。

熱心な彼女は進みも早く、この本の終わりに近づく頃、会社で女性の課長として後輩の面倒を見る事になりました。

「私は雑な人間で感謝を知らない者でした。でも（神の摂理）の偉大さを学び、私の身代わりになってくださった方がいらしたことを知り、鳥肌がたちました。これからも二度読みを続けます」と言っていました。私も何とか頑張ろうと思っています。

私は今年、傘寿になります。動作が鈍くなり、マイナスの面が目立ってきて、もどかしさを感じるようになりました。しかし神様は良き友を沢山与えてくださっていて感謝です。

弥生三月のあした、教会に向かって一号線を歩いていますと、突然雨が降って来ました。荷物があるので、家に戻ろうか、どうしよいかと思っていると、教会の方面から傘を振って急いで迎えに来る人がいました。きびきびと傘を開き、荷物を受け取り、雨に濡れながら教会に運んでくださいました。この信仰の友の、目の覚めるような優しさが身にしみました。

雨なのに教会の屋根がきらきらと光っていた朝でした。

「共に祈る」ことのできる喜び

S. R

一日のうちで私の一番好きな時間は、子どもたちを寝かせる前のひとときです。

夜9時、寝る支度をした子どもたちを遮れて階段を上り、二人をベッドに入れると、おはなしタイムの始まりです。Tが赤ちゃんの時からほぼ毎日読んでいることの一つです。最近子どもたちが大きくなってきたので、絵本ではなく読み応えのある本になり、長い時は30分近くかけて読むことになってしまう日もあります。本を読んでいるうちに、ベッドに入ったはずの子どもたちがお話の途中でベッドを抜け出し、私の横に来てお話しを聞いているので、またベッドに入れなおします。ここでまた、数分経過・・・。

二人の体が再びベッドに納まると、さて、次はお祈りです。ちょっと前まで「できない」と言っていた妹のIも、「きょうはちかがおいのりしている？」と言うようになりました。そこで、昨日はお兄ちゃんのTだったから、今日はI、明日はママね、というように順番を決めてお祈りすることになりました。

「お祈りはね、神さまにお話しすればいいのよ。」何てお祈りすればいいかわからない、という子どもたちに、こんなふうの説明しました。「でも、二つのことは必ず入れてね。一つは、今日一日を振り返って、神さまにありがとうを言うこと。もう一つは、自分以外の誰かのためにお祈りをする。この二つのことをお祈りに入れたら、あとは何でも自分の好きなこととお話ししていいからね。」

二人とも、「えーと」「うーんと」と考えながら、言葉を選び、時間をかけて……生懸命お祈りします。なかなか言葉が出てこなくて、しばらくしーんとなってしまうこともあります。早く寝かせなさいや、と焦りながらも、私にとってはこのひとときがいとおしく、この沈黙の心地よさにしばし身をゆだねてします。

私が毎晩寝る前にお祈りをするようになったのは、小学校6年生の時からです。夏休み前だったか、担任の先生が、寝る前に必ずお祈りしようね、とおっしゃったことがきっかけでした。その時から、私はその約束を忠実に守り、(交通事故に遭って意識がない時と、出産直後の夜昼区別のなくなった一時は例外ですが) 毎晩欠かさずお祈りをするようになりました。

でも、家族で信仰を持っていたのは私ひとりだったので、寝る前はもちろん食前も、家での祈りはいつも一人でした。Tが生まれ、一緒にお祈りしてくれるようになり、共に祈ることのできる家族がいることは、なんて幸せなことだろう、と思いました。今ではIも加わり、食前と寝る前のお祈りが、我が家のいついかなる時にも忘れない日課となりました。子どもたちが祈るようになってからは、クリスチャンではない夫も、両方の実家の両親たちも、一緒に食卓を囲む時は暗黙の了解で、子どもたちのお祈りの言葉に耳を傾けてくれるようになりました。神さまはこの小さな子どもたちを通して、お祈りの輪を広げてくださったのです。

子どもたちの成長によって、夜の幸せなひとときは変化していくではあろうけれど、これからも共に祈ることのできる幸せに感謝して、ずっと大切にしていきたいです。